

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	大阿蘇を仰ぐ : 詩
Author(s)	芙蓉生
Citation	龍南會雜誌, 154: 137-139
Issue date	1914-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6333">http://hdl.handle.net/2298/6333</a>
Right	

つた小さい竹籠の赤と青とが入り違ひに組まれたのを提げて、友達と二人連れでよく來ました。年輩なのは彼の豆腐屋の婆さんの子でしたが余り性質の好い方では無かつたので私は悲しい目に遇つた事がよくありました。彼れは拾つた椎の實を皆に出させて、一緒にして頭割りにしたりしました。私は自分の拾つた椎の實の半分も貰はぬ事がありました。すると私は黙つて籠の中の椎の實を大地に溢して、籠だけ下げて歸つて來るのです。彼れが後から追かけて來て又自分の椎の實も一緒にして呉れやうとする事も度々でありました。其頃、此の向ふあたりに稍廣い場所があつて其處に大きな椎の樹が四五本、枝を交へて居た様に思ひますが、今では皆目見當が付きません。然し印象と言ふものは何と言ふ尊いものでせう。十二三年前の幼な姿があり／＼と眼に映つて來ます。その頃の無邪氣な子供から今の青年に成るまでの過程が、即ち本具の眞性、本地の佛性から遠ざかつて行く過程であつたと言ひます。

牛乳のやうな柔らかな光線の中を、銀色の雨が薄光つて降つて居ます。ふと振り返る途端、私の瞳は直ぐ後方に來て居たとしちやんの瞳と合しました。

——一九一四、三、二五——

## 大・阿蘇を仰ぐ

芙 蓉 生

大阿蘇の偉容と其の絶大の力を現はせる噴煙に接せんことは我が年來の渴仰なりき而して遠望を恣にするに至り一度登岳して目のあたり亨けし印象は我れ長く忘るゝ能はず

描きては消す描きては消す異形の面魔の姿

大空の青の深みに浮び來るこゝらの雜念

噴煙の果なき走り、落ち來る黒き小石は長き唸りの凄さもてととつととつと火口の灰に食ひ入りつものみな  
の目を開きしとき

我が世の昔氣附きしとき

亂れ散りし溶岩の暗示も凝り、現世の粗き腕に冷ややくあの世からなる迷夢も解けざりしか 打ち秘めて熱  
血は包まれし其の幾流れ、

若き男の目の底に春はかゝやく光かな

かの松浦の佐依姫の魂罩めし思かな

赤き薔薇の花の唇動かせし濃艶の面影もありしならん、さあれ柔き曲線のうねり謎となる移り止まらざる自  
然の粉装よ

其の謎たるや何を語れる、思へば凄き力こそなかなか言はぬ心ありなめ

悲しびは人を泣き、蠢動し順る火口の崖のナザレの行者、灰に埋めらるゝ足跡なむ汝れの運命の燒判ならむ  
聲高き色さへもなし、とぼ／＼と危ふげに行く歩み行く

千仞の黒灰の崖の奥深み紫血の湖の悶々あり

煮え騰つては呪ひの焔、苦を抱くが弱き人を盲にして魂奪ひ吸ひ落す盡させぬ山の息づきに小さき魂の怨み  
火や

崖に見る灰の鬼面の目つぶりて何をか待てる

萬丈の深界より來る白き煙、感應の強き力ぞはご去りてなほ目のあたり見る心地こそすれ。

魂を誇らんとする男もあらむ

力をば頼まんとする男もあらむ

我が智恵に百年を委せんとする男もあらむ

美のみを命とせる女もあらむ

花と月とすべてのものゝ美みをば得たらむ顔の人もあらむ、理性と巧と握りたらむ顔の人もあらむされど一

度自然の前に頼づきてその大いなる聞わざる聲をきけ、誇りは而して後にせよ

悲傷せる旅人は小さき心だからだをば横ふる前に絶えず教へつゝある無限の叫びを偲ばすや

昔聞く大阿蘇の嶺今仰ぐ千古の餘噴

嗚呼これぞ大疑解き得む智の健かに昇りてつきぬ希ひ。

## 國風七首

○朝花

春の晩翠

雪とみに雲かどまかふやま櫻あさ日いさよふ影もにほへり

○池邊藤

池のわもに影うちなひくふち浪の水底までも深くにほへり